

中部の

エネルギーを 築いた



豊橋電灯を創設し

産業開発に貢献した **三浦碧水**

愛知県の南東部にある豊橋市は、1869(明治2)年の版籍奉還で江戸時代までの吉田から豊橋に改称した。これは三河国吉田藩名が当時の伊予国吉田藩に似て紛らわしいとのことで明治政府が豊橋藩に変更、それ以降、豊橋の名が使用された。

1889(明治22)年に町村制施行により豊橋町、1906(明治39)年に市制施行により豊橋市となった。その間に豊橋商業会議所、豊橋電灯株式会社などが設立、1905(明治38)年には陸軍第15師団が編成された。また、養蚕業、製糸業が盛んになり蚕都として繁栄した。

今月号は、1889(明治22)年に豊橋町の初代町長に就任し、当時、豊橋の政財界の中心人物で、政治家、実業家として幅広い視野を持ち、豊橋電灯を設立し、終生郷土の産業開発に貢献した三浦碧水を紹介する。



三浦碧水

〔1841(天保12)～1915(大正4)〕
(出典：豊橋市史)

生立ちとその生涯

三浦碧水は1841(天保12)年、吉田藩元締代官役の三浦深右衛門の2男として生まれた。幼名を陽次郎といい、幼少の時から学問を好み、藩校時習館に学び14歳で時習館教方になった。江戸に出て西洋流の兵学および砲術を学び、明治維新には吉田藩歩兵隊指揮役兼兵学校教授の職を以って大阪に出兵し帰郷した。帰郷後は吉田藩歩兵指揮役、軍事局長役になり、1870(明治3)年には豊橋藩少属で租税兼土木勸業開墾係を勤めた。

1878(明治11)年に渥美郡連合村会議長に選ばれ政治に初めて関与した。その後1889(明治22)年に初代豊橋町長、1892(明治25)年に渥美郡選出県議員、1894(明治27)年に第3回衆議院議員に当選し改進黨に所属した。

この間、1877(明治10)年に第八国立銀

行が設立され、2年後に第2代頭取に就任、1882(明治15)年に辞任したが、1886(明治19)年に名古屋の第134国立銀行に合併された。その他豊橋に支店を開設する銀行にも関与し、1898(明治31)年に遠州地方の関係者と相携えて資本金20万円の三遠銀行を設立した。

1893(明治26)年に豊橋商業会議所が設立され、副会頭、会頭に就任し、1900(明治33)年に退任した。この商業会議所に引き続き、翌1894(明治27)年、資本金4万円で豊橋米穀取引所(豊橋町始め6ヶ町村の米商人365人、売買取引高30万石の規模)が設立され、監査役、理事長に就任、その後16年間亡くなる直前まで寄与した。さらに1896(明治29)年に豊橋製糸株式会社を設立し蚕都の先鞭をつけた。このように諸種の事業を興し郷土の

産業発展に貢献した。

また教育にも熱心に関与し、1893(明治26)年に私立補習学校が創立され、これを時習館と名付け、豊橋地方の学問の中心となり、後年、県立第4中学校を経て、時習館高等学校となっていた。

このように豊橋を中心に東三河の産業、文

化の発展に大きく貢献し、1915(大正4)年に75歳で亡くなった。1927(昭和2)年、その遺徳を長く伝えるため豊橋市瓦町の願成寺境内に青銅胸像が建立されたが、大東亜戦争の勃発により供出され現在は残されていない。三浦碧水の略歴は次の通りである。

三浦碧水の略歴(1841～1915)

西 暦	和 暦	履 歴
1841	天保12	吉田藩元締代官役の三浦深右衛門の2男として生まれ、幼名は陽次郎
1855	安政2	時習館教方になる
1868	慶応4	吉田藩歩兵隊指揮役兼兵学校砲術教授の職務を以って大阪に出兵
1870	明治3	豊橋藩少属に任命、租税兼土木勤業開墾掛を勤める
1878	明治11	渥美郡連合村会議長に就任
1879	明治12	豊橋第8国立銀行頭取に就任
1889	明治22	初代豊橋町長に就任
1892	明治25	渥美郡選出愛知県議員に当選
1893	明治26	豊橋商業会議所が設立され副会頭に就任 私立補習学校が設立され、これを時習館と名付けて開設
1894	明治27	豊橋電灯株式会社が設立され監査役に就任 梅田川発電所建設 第3回衆議院議員に当選、立憲改進黨に所所属 豊橋米穀取引所が設立され監査役に就任、その後理事長を勤める
1896	明治29	豊橋電灯株式会社2代目社長に就任、牟婁発電所完工 豊橋製糸株式会社が設立され取締役社長に就任
1897	明治30	三遠銀行設立
1906	明治39	豊橋電灯株式会社を豊橋電気株式会社に改称 見代発電所完工(出力：360kW)
1908	明治41	豊橋に第15師団を配置
1909	明治42	下地火力発電所建設(出力：150kW)
1910	明治43	福沢桃介が4代目社長に就任、寒狭川電気株式会社を設立
1911	明治44	豊橋電気株式会社が寒狭川電気を合併 浜田電気株式会社に出資 西遠電気株式会社を設立
1915	大正4	逝去
1927	昭和2	三浦碧水胸像建立

豊橋電灯株式会社の設立

1893(明治26)年に設立された豊橋商業会議所の最初の事業として取り上げたのは電灯事業で、後の豊橋電灯株式会社の発起人となる佐藤弥吉が会員有志を代表して電気灯設立に関する建議書を提出した。その内容は「質素の旧態を固守し世運の進歩に伴わざるは、当時商業の得策というべからず、塾を惟うに豊橋町は当時東西両京の中央にありて水

陸運輸の利に富み一の商業地なり疑うべからず。然り而して天然の地制すでに斯くの如して雖も、人為の補償はいまだ全からず。然るを東に浜松ありて関東男子の気性に倣い鋭意を鼓舞し今や大に同地方商業上の面目を改めんとし、西に岡崎ありて熱心移應の衰運を挽回せんことに汲々し夙夜を怠らず。その効果を見るは遠きにあらざるべし。されば天然の

商業地たる吾豊橋のごときは体面を一新し新種の奇勝を鼓舞し、もって人語に落ちざらん事を計画せずんばあるべからず。故に茲に電気灯を設置せんことを欲す。然りと雖も電気灯の設置は地方においては事創始に属し経験に乏しきにより、十分の調査を遂げ其の利害得失を考究せざるべからず。以て当会議所に於いて調査せられんことを希望す。」と述べ、時代の趨勢に応じて電灯事業を興すため調査研究が必要であると上申した。

この建議により、商業会議所副会頭三浦碧水始め5名が調査委員に選ばれ、各地の状況を調査することになった。特に三浦は東京、箱根、浜松など各地で調査を行い、さらに箱根電灯湯本発電所を視察した。これらの調査で、後に技師長となる大岡正から、「電気灯は費用が多分にかかるが、豊橋のような人口1万人位の小都市でも2里以内の地点に幅1間、深さ2尺、高さ1条の水流があれば、水力利用で300灯の電気灯が設置されれば計算上は利益が生ずる」ということで、1894(明治27)年に豊橋電灯株式会社が資本金15,000円で設立された。この設立は全国で14番目、愛知県では名古屋電灯に次いで2番目であった。

① 梅田川発電所

梅田川発電所は1894(明治27)年に梅田川から取水し運転を開始した。当時、わが国初期の発電方式は火力発電で、発電機や蒸気機関は欧米からの輸入品であった。ところが豊

橋電灯は初めから水力発電を計画した。この梅田川発電所の発電設備については不明な点が多いが、発電所の設計は大岡正、水車は三吉電機工場製のレッフェル型水車、水車発電機は2,000v、15kWの三吉電機工場製国産の単相交流発電機であった。この時期における2,000v送電は日本では早い時期の高圧配電であったが、水車構造の欠陥と水量不足のため計画通りに発電できず蒸気機関を設置した水力・火力併用の発電所で水力の電力不足をしのいだと豊橋電灯第1回事業報告書の営業状況について記載されている。このような状況で期待外れに終わったが、新技術を導入し水力発電事業の普及に大きな足跡を残した。

② 牟婁発電所

牟婁発電所は1895(明治28)年に農業用水を利用し発電した。このように農業と電力が用水を共用したことは日本でも早い試みであった。発電所の設計は名古屋電灯の丹羽正道、工事監督として三吉電機の小田庄吉が当たった。水車は42インチのヘルキルス型、水車発電機は三吉電機工場製の2,000v、30kW(16燭光の電灯600灯分の出力)のホプキンソン型単相交流発電機が設置された。しかしここでも用水の水量だけでは不足し火力により水力を補助する発電方式とした。1900(明治33)年に50kW、1905(明治38年)に80kWに増設された。

豊橋電気株式会社へ改称

1908(明治41)年に第15師団司令部が豊橋に設置された。師団誘致に当たっては広大な演習場や営舎のほか電気、水道の設備が必要であった。この急増する電力需要のため増資して発電所を建設し、1906(明治39)年に豊橋電気株式会社に改称した。

③ 見代発電所

見代発電所は1908(明治41)年、豊川の支流巴川に建設された水路式発電所で、出力360kW、水路総延長2,439m、落差110mあった。発電所から下地変電所まで約25km

を3相交流11,000vで送電した。特別高圧11,000vの送電は愛知県下で初めてであった。

この発電所は1月号で紹介したように1917(大正6)年に東三電気に譲渡され、中部配電を経て中部電力に継承されたが1959(昭和34)年に廃止された。

④ 下地火力発電所

下地火力発電所は見代発電所の湯水時の発電力低下を補うため1910(明治43)年に出力150kWで建設された。機関はランカシャ型東京芝浦製作所製300馬力2台、発電機は

同じく東京芝浦製作所製の150kWであった。この発電所は布里発電所の竣工に伴い大正8年に廃止された。

⑤ 豊川水系の水力発電所群－長篠・布里・横川発電所－

豊橋電気の需要は飛躍的に上昇していったため、かつて寒狭川と呼ばれた豊川に長篠発電所、布里発電所、横川発電所を国産技術で次々に建設していった。この3発電所は中部電力㈱で運転中の現役の小規模水力発電所である。

長篠発電所(出力：500kW、1915(大正4)年増設後：750kW)は1912(明治45)年に建設された。設計は同社の主任技術者今西卓で、1920(大正8)年に建立された長篠発電所竣工記念碑の裏面に「水車発電機ともにナイヤガラ型と称し本邦にて本発電所を以て使用の嚆矢となす」と記され、取締役社長福沢桃介、技師長今西卓らの建設関係者が刻まれている。

ここの発電所の特徴はナイヤガラ型の立軸式発電で、堰堤は発電所の上流900mのところで両岸からせり出している岩により川幅が狭くなった地点にコンクリートで造られた。導水路は川沿いの左岸に設け、降雨の後に川の水位が上昇すると、余水吐(よすいはけ)から余水が滝のごとく流れ落ちる様はナイヤガラの滝の景観を思い起こさせる。



長篠発電所の堰堤(上)と水路の溢流堤(下)

布里発電所は1919(大正8)年、横川発電所は1922(大正11)年に建設された。両発電所とも設計は今西卓で、長篠と同形式の立軸方式で、水車は電業社製のフランスス水車、発電機は芝浦製作所製であった。

この3発電所の詳細については“ひかりとねつ7月号：「東三河・穂の国」豊川水系の3発電所”を参照されたい。

豊橋電灯株式会社が建設した会社

西暦	和暦	発電所名	出力(kW)	所在地	備考
1894	明治27	梅田川発電所	15	渥美郡高師村	明治28年廃止
1896	明治28	牟婁発電所	30	渥美郡牟婁村大西	大正4年廃止
1908	明治41	見代発電所	250	南設楽郡作手村	昭和34年廃止
1910	明治43	下地火力発電所	150	豊橋市下地町	大正8年廃止
1912	明治45	長篠発電所	500	南設楽郡長篠村	大正4年増設：750kW
1919	大正8	布里発電所	510	南設楽郡鳳来寺村	大正17年増設：710kW
1922	大正11	横川発電所	800	南設楽郡長篠村	昭和60年増設：810kW

これより先、豊橋電気の2代目社長に就任した三浦碧水は、静岡県湖西地方に進出するため、西遠電気株式会社を1913(大正2)年に設立したが3年後の1916(大正5)年に豊橋電灯と合併した。また豊橋電気は1911(明治44)年に資本金100万円の大企業に成長したが、発電所建設に伴う資金は地元では賸いき

れず、後に日本の電力王と呼ばれる福沢桃介が三浦碧水らの要請で筆頭株主になり1910(明治43)年、社長に就任した。さらに福沢桃介が名古屋電灯㈱の社長に就任するなど電力事業を拡大していき、1921(大正10)年に名古屋電灯は豊橋電気を合併した。

(寺澤 安正)